九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

雑誌「蒙疆文学」(日本語版)目次(上) : 自一九四二年六月至一九四四年八月

阿莉塔
九州大学大学院比較社会文化学府博士課程三年

https://doi.org/10.15017/8488

出版情報 : 九大日文. 5, pp.385-409, 2004-12-01. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン :
権利関係 :

雑誌「蒙疆文学」（日本語版）解説及び目次（上）

自一九四二年六月至一九四四年八月

阿莉塔（ARITA）

凡例

一、本目次・解説は、日本近代文学館所蔵の原本（ただし全巻でなく、不揃い一四冊）のコピーを元に作成した。

二、旧字体はすべて新字体に改め、仮名遣いは旧仮名遣いのままとした。

三、奥付け発行年はすべて西暦とした。

四、作品名・著者名・頁数は、目次を基準とした。ただし、本文の表記と違う場合は、その都度紹介しておくこととした。

五、＊は編者の注記を表す。

六、本稿では、第一巻第二号から第三巻第五号までのうち一四冊のうち（上）として第二巻第四号までの七冊を扱った。ただし、未見本は除く。

第一巻第一号　一九四二年六月五日発行（＊未見）
第一巻第二号　一九四二年七月二八日発行

表紙（一）（＊口絵なし）
表紙（二）（＊蒙疆文学同人名簿）
短文　（＊「七・七記念日を迎へて」）
目次
外地文学の建設について（＊評論）　浅地央　六～九
（＊本文では「外地文学の建設に就いて」と表示）
詩
あね　二位原経清　一〇～一一
また、歩きだすのだ　南春夫　一二～一三
南夷征行　泉徹夫　二七
南の窓　後藤静雄　三六
（＊本文では「後藤静男」と表示）
餓人杜甫（＊翻訳・解釈）　小池秋羊　一四～二二
文芸時評（＊評論）　浅井彰夫　三〇～三五
オルドス（＊短評）　二八～二九
蒙疆文学賞・作品募集　四～五
随筆
「蒙疆文学」創刊号雑感　大平俊久　二三～二四
文化面の振作について　筈見武夫　二四～二五
東京から　沼田英一　二五～二六
此頃のことども　赤塚欣二　二六～二七

演劇部報　新井完三　一二～一三
（＊本文では「新井完造」と表示）
発刊記念会後記　一〇
（＊本文では「蒙疆文学」発刊記念会後記」と表示）
回覧板　一一
創作
北に生き抜く人々（七〇枚）　石塚喜久三　三五～六一
（＊本文では、タイトルは「北に生きぬく人々」、開始頁数は「三七」と表示）
文芸懇話会規約　六二
（＊本文では「蒙疆文芸懇話会規約」と表示）
表紙（三）（＊編輯後記、奥付）
表紙（四）（＊広告）

第一巻第三号　一九四二年九月発行（＊未見）

第一巻第四号　一九四二年一〇月二五日発行

表紙（一）（＊蒙疆短歌会合併記念号）
表紙（二）（＊「蒙疆日本人興亜協力会宣言・綱領」）
広告
目次
短歌の理念　南春夫　四～七
短歌作品Ⅰ
雑詠　大江新　八
蒙古桜　山口智恵　八
逝きし友を憶ふ　中村洋子　八
敵機襲来　伊知原甲一　一〇
（＊本文では「敵機襲来」と表示）
通州にて　神林節　一〇
雑詠　中元国夫　一一
晋北渾源行　安地信人　一一
（＊本文では「宮地信人」と表示）
雑詠　平澤高美　一二
作歌私論（一）（＊評論）　神林節　一三～一六
蒙疆の歌（＊評論）　本田興村　八～一二
短歌作品Ⅱ
（＊本文では開始頁数を「一八」と表示）
黄塵　野田留吉　一八
喇嘛廟行き　戸倉さい子　一八
雑詠　福井美智子　一八
瓦に題す　本田興村　一九
花と雨　川添まなぶ　一九
雑詠　松井卓海　一九
雑詠　小野坂仲三郎　一九
本多ケ丘に詣りて　金井春雄　一九
オルドス（＊短評）　二〇～二一
詩

しろいかべ　南春夫　三〇
海征く弟　大川きく　三一
勇ましくない文学（＊随筆）　青木啓　二二～二三
奈落または漠然たるものについて（＊随筆）　沼田英一　二三～二五
日々片々（＊随筆）　林田芳人　二六～二七
此頃のことども（＊随筆）　赤塚欣二　二八～二九
創作
輪廻（七十三枚）　牛村義雄　三二～五六
（＊本文ではタイトルを「輪廻」と表示）
仲秋節観月会後記　一七
九月の記録　一七
回覧板　一六
表紙（三）（＊編輯後記、奥付）
表紙（四）（＊広告、発行日・定価など）

第一巻第五号　一九四二年一一月発行（＊未見）

表紙（一）（＊大東亜戦争一周年記念、蒙疆文学賞『詩』入選発表）
表紙（二）（＊蒙疆文芸懇話会会員名簿）
短文（＊「大東亜文学者大会宣言」）
目次
大東亜戦争一周年を迎へて（＊巻頭随筆）　四～五
蒙疆文学賞・詩・入選発表　六～七
水を運ぶ老人（＊詩）　南春夫　一〇～一一
駱駝（＊詩）　落合郁郎　一二
包頭の土城に倚りて（＊詩）　甲斐弦　一三
清河の畔にて（＊詩）　赤塚欣二　一四
静動（＊詩）　原昌　一五
愛情（＊詩）　八雲郁重　一六～一七
選後寸言（＊選評）　三好達治　八
選後寸評（＊選評）　前田鉄之助　八～九
オルドス（＊短評）　一八～一九
西北序説（二）　八重沢光　二〇～二八
ソニツト通信（第二報）　林正盛　三四～三九
短歌の理念（承前）（＊評論）　南春夫　二九～三三
短歌
蓖麻の葉　宮地信人　三一
張家口に三年ありて　高野たけし　四二
身辺雑詠　神林節　三一
秋日　神林節　四五
三陽泉に遊ぶ　山口智恵　三三
雑詠　市尾フクヱ　四二
雑詠　伊知原孝一　四五
俳句
十二月八日を迎ふ　金子蟹石　五一

夜寒　深堀矢寿路　五一
愛路村視察記（＊ルポルタージュ）
水荘屯を訪ねて　竹坡生　四〇～五〇
農村雑記　高島喜久夫　五〇～五四
慰霊祭にて（朗読詩）　二位原経清　五六～五七
創作
復活祭まで（第一回）　林田芳人　五八～六七
憎恨　青木啓　六八～七六
表紙（三）（＊編輯後記、奥付）
表紙（四）（＊標語、発行日・定価など）

第二巻第一号　一九四三年一月一日発行

表紙（一）（＊口絵「女性肖像、署名省三」）
表紙（二）（＊「蒙疆文芸懇話会会員」名簿）
短文　（＊「蒙疆日本人興亜協力会」宣言）
目次
創作
纏足の頃　石塚喜久三　四～二六
初期の経験　仲田六郎　二七～三七
鉄橋と少年　森江栄　八三～四四
（＊開始頁数は本文では「三八」と表示）
復活祭まで（第二回）　林田芳　四五～五八
蒙疆文学賞・短篇小説・入選発表　五九
（＊入選は石塚喜久三「纏足の頃」／佳作は小池秋羊「緑山荘」・八雲郁重「生活」・仲田六郎「初期の経験」・森江栄「鉄橋と少年」・小柳哲夫「芽ばゆるもの」）
選者の言葉（＊選評）　上泉秀信　六〇～六一
評論
大東亜文学に就ての覚書　小池秋羊　六四～六八
創業期の陣痛　八重澤光　六九～七八
（＊本文では副題「―蒙疆文学論の一章―」と表示）
短歌
（＊作品名は目次に記載されていないが、本文に拠る）
葡萄其他　宮地信人　七九
「冬」　高野たけし　七九
苦力生活六題　神林節　七九
弟　神林節　六八
秋より冬へ　川添まなぶ　六八
三陽泉に再び遊ぶ　山口智恵　九〇
旅路　中村洋子　九〇
児　市尾フクヱ　九一
雑詠　伊知原幸一　九一
雑詠　戸倉さい子　九一
オルドス（＊短評）　六一～六三
（＊本文では開始頁数を「六二」と表示）
黎明オルドスの暁鐘
―大樹湾蒙民移墾部落記―（＊ルポルタージュ）

蒙古民族の口伝（＊聞き書き）　増田弘道　八〇〜八七
蒙古の法律　小川三直　八八〜九一
塞北の鎮（農村を往く―二）　筈見武夫　九二〜九四
俳句　浅地央　九六〜一〇五
（＊作品名は目次に記載されていないが、本文に拠る）
土を截る立体　萩原寥　九五
晩秋初冬　深堀矢寿路　九五
秋　大川きく　九五
随筆
青葉の輝き　牛村義雄　一〇九〜一一一
自炊漫談　石塚喜久三　一一一〜一一二
日々片々　林田芳人　一一二〜一一四
此頃のことども　赤塚欣二　一一四
詩
吾児の歌　二位原経清　一〇六
郷愁　後藤静穂　一〇七
雑想　小柳哲夫　一〇八
表紙（三）（＊編輯後記、奥付）
表紙（四）（＊新書紹介、発行日・定価など）

第二巻第二号　一九四三年二月一日発行

表紙（一）（＊口絵は前号同様）
表紙（二）（＊広告）
ポスター　（＊兵隊の肖像）
目次
創作
緑山荘　小池秋羊　一〇〜三八
生活　八雲郁重　三九〜六〇
復活祭まで（第三回、完結）　林田芳人　六一〜七八
（＊本文では「復活祭まで（第三回）」と表示）
短篇小説選評（＊選評）　横光利一　七〜九
蒙疆文化への約束（＊巻頭随筆）　四〜六
（＊本文には「―蒙疆興亜文化同盟の発足にあたりて―」という副題が付されている）
日本詩魂について（＊評論）　二位原経清　七九〜八〇
詩
秋の蝶　大川きく　八一
十二月八日　落合郁郎　八二〜八三
鞴鞄　緒方禾　八四〜八五
オルドス（＊短評）　丹沢望　八八〜九五
新湾子行（＊紀行文）
古城堡へ（陽高古墳発掘行）　武三朗　九六〜一〇七
（＊紀行文。本文では副題「―陽高古墳発掘行―」と表示）
短歌
（＊作品名は目次に記載されていないが、本文に拠る）
雑歌　大江新　一二二

冬にやみて　野たけし　一二二
ふるさと　中村洋子　一二二
雑詠　迎山恵生　一二三
絵と文
春日・城壁　高玉輝雄　一〇八～一〇九
俳句
（＊作品名は目次に記載されていないが、本文に拠る）
寒天　武田鵞水　一二四
凍夜　川口白涯　一二四
蜜柑　深堀矢寿路　一二四
雑詠　服部勝湖　一二五
近詠　金子蟹石　一二五
蒙古美術展　大川きく　一二六
冬　小野満仁　一二六
戦ふ春　金子蟹石　一二六
（＊左記三人の作品名は目次にも本文にも未表示。著者名の上方に「戊第〇〇〇〇部隊」と表示）
村上心美　一二六
遠藤たけし　一二六
中野鶯声　一二六
蒙古民族の口伝(二)　（＊聞き書き）
橋口三郎　一一〇～一一七
『黄河』に就ての手帖（＊随筆）
横澤宏　一一八～一二一
大同俳句部十二月例会　一二四～一二五
表紙（三）（＊編輯後記、奥付）
表紙（四）（＊広告、発行日・定価など）

第二巻第三号　一九四三年三月一日発行

表紙（一）（＊口絵「女性の肖像、署名省三」）
表紙（二）（＊広告）
広告　（＊広告）
目次
詩
絶嶺（＊散文詩）　落合郁郎　四～五
死の街（＊散文詩）　横澤宏　六～七
（＊本文に「―蒙疆詩景の一―」と副題がある）
火のある風塵　柘榴研太郎　八～九
黄塵空を覆ふ　赤塚欣二　一〇
紀元節（長歌）　高野たけし　一一
児玉芳郎君　南春夫　一二～一三
オルドス（＊短評）　一四～一五
現地主義文学についての保守的感想（＊評論）
沼田英一　一六～二一
無軌断想（＊随筆）　青木啓　二二～二三
蒙古美術研究所の誕生　高玉輝雄　六二
（＊本文では「蒙疆美術家協会研究所設立について」と表示）

絵と文
温み火　西原良蔵　二四～二五
子供の顔　高玉輝雄　二六
オボ祭り　山田英哉　二七
（＊本文では「オボ祭」と表示）
蒙古民族の口伝(三)　（＊聞き書き）　橋口三郎　二八～三三
スニツト通信（第三信）（＊ルポルタージュ）　林正盛　三四～四〇
（＊本文では「ソニツト通信（第三報）―「ノゴー」―と表示）
美しき人達　（＊小品）　石塚喜久三　四二～四三
此頃のことども（＊随筆）　赤塚欣二　六二
（＊本文では開始頁数「六三」と表示）
俳句
（＊作品名が目次に記載されていないが、本文に拠る）
平旺村ほとり　萩原寥　四一
炉の焔立つ　金子蟹石　四一
創作
王子村　丹沢望　四四～六一
（＊本文では「王子村（ワンズソン）」と表示）
代用通訳　丘土筆　六四～八三
編輯後記（長浜）
表紙（三）（＊ポスター「兵隊の肖像」）
表紙（四）（＊広告、発行日・定価など）

第二巻第四号　一九四三年四月一三日発行

表紙（一）（＊口絵「遊牧民生活風景」）
表紙（二）（＊広告）
広告　（＊広告）
目次
中国禁煙法令変遷史(一)　于恩徳　小路嘉治訳　四～一三
（＊本文では「于恩徳著　小路嘉治訳」と表示）
詩
祈り　落合郁郎　一四
秋雨　関根博司　一五
黄塵余録　菊池重雄　一六～一七
オルドス（＊短評）　一八～一九
蒙古民族の口伝(四)（＊聞き書き）　橋口三郎　二〇～二七
草原抄(歌)　篠津原一郎　三〇
（＊本文では「草原抄」とのみ表示）
春立てむ(歌)　鈴木透　三一
（＊本文では「春立てむ」とのみ表示）
野火(歌)　中村洋子　三一
（＊本文では「野火」とのみ表示。他「蒙古を思ふ」）
絵と文
察哈爾の花嫁　大西喜美子　二八
草原　高玉輝雄　二九

様式創造（＊評論）　野津彰　三二〜三三
他山の石　（＊小品）　石塚喜久三　三三〜三五
美しき人達（二）（＊小品）　石塚喜久三　三五
悲愁抄（一）　（＊俳句）　萩原蓼　三六〜三九
（＊本文では、副題「……俳句の伝統を霾あれる蒙疆に産まんとして……」、著者「萩原寥」と表示）
俳句
（＊作品名は目次には表示されていないので、本文に拠った）
裘（かはごろも）　金子蟹石　四〇
局友の結婚を祝して　金子蟹石　四〇
雑詠　中野鶯声　四〇
雑詠　小松よしを　四〇
春　山本重雄　四〇
創作
甘露　小池秋羊　四一〜五一
歪められた部落民　橋口三郎　五二〜七四
古城物語　丹澤望　七四〜八六
編輯後記　八七
広告　（＊広告）
表紙（三）（＊広告）
表紙（四）（＊広告、発行日・定価など）

解説

Ⅰ

蒙疆（もうきょう）とは、盧溝橋事変の直後、関東軍の扶植によって作られた「蒙疆政権」の管轄下に置かれた内モンゴルの中・西部のことを指す。「蒙疆政権」とは、一言で言うと、「第二の満洲国」に類似した政権である。実は、「蒙疆政権」という言い方は、日本側の俗称にすぎず、正式な名称は「蒙古連合自治政府」（一九三九・九・一）という。首都は張家口であった。

「蒙疆（もうきょう）文学」は、蒙疆文芸懇話会の機関誌として、一九四二年六月五日蒙疆の首都張家口で創刊された。終刊号は不明である。

蒙疆文芸懇話会の前身は、「蒙疆詩人協会」といい、一九四〇年少数の文学愛好者によって組織され、専ら詩の研究、発表、朗読等を行っていた。翌年四月「文芸懇話会」としてスタートした。同会は、月刊文化雑誌「蒙疆文学」のほかに、ラジオを通じて詩の朗読、ラジオドラマの放送等を行い、また蒙疆を訪れる文化人を囲む座談会を開催し、蒙疆文化活動の中核として活躍していた。また、一九四二年一二月より中国語版の月刊雑誌「蒙疆文学」も発行した。

同会は、本部を蒙疆の首都張家口に、支部を大同、厚和、包頭、宣化の四大都市に設けていた。幹事長は、小池秋羊（一九四三年現在）であった。

蒙疆文芸懇話会の会員は、「蒙疆文学」第一巻第六号現在で

は、以下のようなメンバーであった。伊知原孝一、石川素光、石塚喜久三、泉徹夫、萩原寥、筈見武夫、林正盛、林田芳人、二位原経清、沼田英一、音尾秀夫、落合郁郎、大久保勲、大江新、大平俊久、岡土筆、岡野青志、緒方禾、小沢敏夫、金子蟹石、神林節、横沢宏、高市英夫、高玉輝雄、高野たけし、高山和夫、高島喜久夫、武田守弘、丹沢望、中村洋子、長浜連、牛村義雄、山口智恵、八重沢光、八島甫、小谷昌毅、後藤静穂、青木啓、赤塚欣二、浅井彰夫、浅地央、亜島荘二、菊池重夫、南春夫、宮地信人、渋谷三郎、平沢高美、鈴木知己。

蒙疆文芸懇話会は、単なる文学愛好者の文芸団体ではなく、国策に協力する一面も持っている。この事は、「当会ハ職能翼賛ノ本旨ヲ体シ吾ガ蒙疆文化精神ノ昂揚ト東亜民族ノ協力一致ノ樹立ヲ目的トス」（蒙疆文芸懇話会規則第二条）、「政府ノ行フ文化政策ニ職能協力ノ万全ヲ期ス」（第四条）という団体規則に明白に表れている。

「蒙疆文学」の同人は、第一巻第二号現在では、石塚喜久三、泉徹夫、稲葉正夫、林正盛、筈見武夫、二位原経清、沼田英一、大平俊久、岡土筆、緒方禾、高市英夫、高瀬源一、長浜連、後藤静男（同号では「後藤静雄」とも表示されている）、青木啓、赤塚欣二、浅井彰夫、浅地央、菊地重夫、木沢瑜、南春夫、白波利典、鈴木知己の二三名である。

編輯兼発行人は、第一巻第二号から第二巻第九号までは赤塚欣二（第一巻第一、三、五号は未見。張家口興亜大街和光荘二〇号在住）で、第三巻第一・二号は小池秋羊（張家口興亜大街和光荘二九号在住）で、第三巻第五号は筈箕武雄（第三巻第三、四号は未見。張家口明徳南大街二五九在住）であった。

発行所は、張家口興亜大街和光荘二〇号にあった蒙疆文芸懇話会である。印刷人は浅枝警、印刷所は蒙疆印刷局で、両者とも張家口興亜大街にあった。

判型は菊判である。頁数は、少ない場合は五六頁で、多い場合は百二七頁である。定価は、第一巻第四号から第三巻第一・二号までは五〇銭で、第三巻第五号は一円であった。（第一巻第一、三、五号、第三巻第三、四号は未見。）一般店頭販売の許可を得たのは、第一巻第四号からだったので、それまでは「会費」として五〇銭と表示されていた。通信投稿先は、張家口郵電局私書函第二一号であった。

敗戦三年前に創刊された「蒙疆文学」は、「月刊文化雑誌」として発行されたが、編集人不足や戦況の影響などによって、必ずしも毎月出されたわけではなかったようである。また、いつ終刊となったかも不明である。現在、日本近代文学館に所蔵されているのは、第一巻第二号から第三巻第五号までの不揃いの一四冊しかない。しかし、それらの資料から、少なくとも合計一九冊まで発行されたこと及び、昭和一九年八月に発行された第三巻第五号以降も続行して刊行される予定があったことが判明した。

「蒙疆文学」は、蒙疆唯一の文化雑誌と評されていた。その大きな理由は、蒙疆文芸懇話会という政府の政策に協力する団体の機関誌であったからである。また、市販によって同誌の知

名度があげられたことも一つの理由として考えられる。同誌を支えた力強い後ろ盾の存在及び市販されたことによって、その影響力が増加し、「唯一の文化雑誌」の地位を確立することに至ったのである。

しかし、実際蒙疆においては、日本語の文化雑誌は他にもあった。例えば「蒙銀」誌の存在である。「蒙銀」とは、〈蒙疆銀行〉（一九三七・一一・二二設立）という〈特殊会社〉が出していたもので、創刊（一九四〇・八）は、「蒙疆文学」より二年近くも早かった。全巻一一冊ある。一口に言うと蒙疆銀行の「行友会誌」であったが、「論文、随筆、小説、詩、和歌、俳句、川柳」等のジャンルを持つ文学雑誌でもある。このように、蒙疆時期では、店頭販売されずに社内・同人の範囲に限って出された同人誌は、他にも眠っているかもしれない。蒙疆の文化、特に文学についての研究は未踏の領域に止まっているのが現状である。

Ⅱ

さて、次は、創刊号から第二巻第四号までのうちの七冊について、具体的な内容などに触れてみたい。ただし、未見本については、コメントを控えておく。

第一巻第一号は、一九四二年六月五日に発行された（＊未見）。

第一巻第二号は、一九四二年七月二八日に発行された。

巻頭において、評論「外地文学の建設について」（浅井央）が載せられた。筆者は、外地文学を含める大東亜文化建設の必要性、外地文学とは決して「日本文学」の延長ではない、外地文学・文化と現地社会との緊密な連結について論じている。この評論を巻頭に掲載した意図について、本誌の編輯兼発行人赤塚欣二は「編集後記」において、「今月は巻頭に浅地の「外地文学の建設について」を掲げた前月の長浜の「蒙疆文学について」と併読して貰へたら我々の行き方の大要は掴んでもらへることと思ふ」と述べている。即ち、「蒙疆文学」は、「大東亜共栄圏の文化」という大きな枠組みに属しているのは言うまでもないが、また独自のものでなければならないと強調されている。

もう一つの評論は、「文芸時評」（浅井彰夫）で、主に創刊号の小説「縁有る衆生」（石塚喜久三）と「花ぐもり」（赤塚欣二）について論じている。前者については作品の陰惨さが濃厚、後者については説明的な手法で作品の具体性を奪い取ったと創作上の失敗を指摘する。

本号は「詩」の紹介に力を入れている点も注目すべきである。このことは、蒙疆文芸懇話会の前身が「蒙疆詩人協会」であったことと関連しているかもしれない。詩欄には、四首の詩が掲載されている。四首のうち、祖国日本のために勇敢に戦っている戦士を称えたものが三首にものぼる。二位原経清の「あね」（詩の末尾に「―薩摩路にて―」という記載がある）は、「あね」の写真を抱いたまま自爆した一人の特攻隊員を称えたもの。泉徹夫「南夷征行」（二六〇二、五、二七）と脱稿年月日の記載がある）は、

日本軍の南海への進軍を称えた内容である。後藤静雄「南の窓」（筆者名は本文では「後藤静男」と表示）も、日本軍の南方への進軍を称えたものである。唯一個人的な感傷をテーマにしたのは、南春夫の「また、歩きだすのだ」（「一二六〇」、一一、八―」と脱稿年月日の記載がある）である。

また、「餓人杜甫」は、詩と関連する作品である。これは、杜甫の詩「羌村三首」「京より奉先県に赴きて懐ひを詠む」「月夜」「幼子を憶ふ」「興にふれて作れる」の日本語の口語訳・解釈を試みた作品である。筆者の小池秋羊は、一九〇七（明治四〇）年生まれ、群馬県出身である。渡蒙後、蒙疆電業営業課営業係長に務め、張家口興亜大街和光荘に身を置いていた。また、蒙疆文芸懇話会の幹事長の重役を担っていた。

随筆の存在も大きかった。随筆欄には、四篇の随筆が集められた。「「蒙疆文学」創刊号雑感」（大平俊久）は、主に創刊号の小説「縁ある衆生」（石塚喜久三）と「花ぐもり」（赤塚欣二）について論じる。前者については「地味な作品で、ヂツクリ対象と取組み、流石に老朽さを示して居る」とやや高い評価を下し、後者については「説明的（地の文が多い為）で、物足りなさを感じた」と構成上の欠点を指摘する。「文化面の振作について」（筈見武夫）のなかで、筆者は「戦争の進展に並行し物資に就てのたが（ママ）発せられるやうに、文化面の貧困が謳はれては、国家発展の動力は戦争に依つて却つて停滞と萎縮とを招来して了ふ。この杞憂を無意義たらしむる嘆めにも、鋭意文化面の振作を切望して止まない」と述べる。「東京から」（沼田英一）は、前半は創刊号についての感想、後半は東京での雑感を述べるものであった。「此頃のことども」では、筆者は、かつて同人雑誌「鋪道」と「第二次鋪道」を作った筆者の学生時代の経歴に触れている。筆者の赤塚欣二は、大正二年生まれ、熊本県出身である。蒙疆電業に勤務しながら、「蒙疆文学」の編輯兼発行人を務めていた。彼は張家口興亜大街和光荘二〇号に居住していた。また、この住所は、本誌の発行所である蒙疆文芸懇話会の拠点でもあった。「蒙疆文学」は、編輯人をはじめとしたスタッフが、すべて他の本業を持つアマチュアの文学雑誌であった。

創作欄は、中篇小説「北に生き抜く人々」の一篇であったが、この号の半分弱の紙面を占めた大作である。満洲事変の直前に起きた〈中村大尉事件〉をテーマにしている。小説に対する説明として、「中村少佐」と書かれているが、「中村大尉」が正しい。「七・七記念日を迎へた今日意義深き作品と云ふべきである」と評価されている（「編輯後記」）。

筆者の石塚喜久三は、一九〇四（明治三七）年生まれ、北海道小樽出身である。一九四〇（昭和一五）年渡蒙し、華北交通張家口鉄路局に就職しながら、蒙疆文芸懇話会の幹事となった。また、本誌の創刊号では、彼の「蒙疆文学」誌上初の小説「縁ある衆生」が発表されている。ここで、訂正すべき点が一つある。現在、石塚喜久三の「略年譜」（木原直彦編『芥川賞全集』第三巻、文藝春秋社、一九八二・四）において、「縁ある衆生」が「久雄」と紹介されているが、久雄とは、「縁ある衆生」の登場人物で、小説の題名ではない。

この号から、早くも「蒙疆文学賞・作品募集」が出された。趣旨は大東亜共栄圏の新文化の創造で、主催は「蒙疆文芸懇話会」と「蒙疆新聞社」で、後援は「蒙古政府弘報局」である。応募部門は、長篇小説・短篇小説・戯曲・詩・民族歌謡の五つで、各部門毎に詳細な応募規定がある。言語は日華蒙文の三種。

本誌の毎号の固定欄として、「オルドス」の名があげられている。「オルドス」とは、モンゴル語で「宮殿」或いは「チンギスハーンの祭殿群」という意を表す語で、蒙疆の地方色を彩るには格好の言葉だと思われたのかもしれない。「オルドス」欄は、内容的には時事についての短評や文化消息を紹介するようなものが多い。無署名であるが、執筆者は複数のようである。

他には、回覧板という小さなコラムがある。原稿締切厳守、同人費払込、私書函開設、同人消息（人事異動四件）など。

最後の頁に「蒙疆文芸懇話会規約」の全文が載せられている。規約の全文は、編者が文末の「附記」において紹介しておく。

第一巻第三号は、一九四二年九月に発行された（＊未見）。

第一巻第四号は、一九四二年一〇月二五日に発行された。

この号は、「蒙疆短歌会合併記念号」と特筆された通り、〈短歌特輯号〉となった。短歌作品は二組も取り組まれ、執筆者は一六人にものぼった。

「短歌作品Ⅰ」では、以下のように八人の短歌を集めた。

大江新の「雑詠」は一〇連で、皇軍が戦っているとき病気を恐れる自分が恥ずかしくなったという「雑感」。山口智恵「蒙古桜」も一節一〇連で、蒙古の桜や古い廟などの景観を歌うものである。中村洋子「逝きし友を憶ふ」は九連で、ハルピンで病死した友人を偲ぶ歌である。伊知原甲一「敵機襲来」（本文では「敵機襲来」と表示）は一〇連で、日本軍の〈南の諸島〉での勝利を賛美した内容。神林節「通州にて」は六連で、盧溝橋事件直後に起きた〈通州事件〉で亡くなった〈同胞〉を偲ぶ歌。通州とは、北京の郊外に位置し、日本の傀儡政権「冀東」の所在地であった。中元国夫「雑詠」は六連で、親友の戦死をテーマにしている。平澤高美「雑詠」は八連で、北京にいる妻子を恋しがる歌。安地信人「晋北渾源行」は八連で、蒙疆の部落へいく途中での様子を描いている。安地信人は本文では「宮地信人」と表示されている。「編輯後記」では「短歌部の責任者の宮地」と紹介されている。また、蒙疆文芸懇話会会員名簿（第一巻第六号）では「宮地信人」と記されている。したがって、「安地信人」は「宮地信人」の誤植の可能性が高い。

「短歌作品Ⅱ」においても八人の作品を発表した。作品名は目次に記載されていない。「黄塵」（野田留吉）は、「駅頭にて」（五連）と「工場見学」（四連）より成り立っているが、前者は道中での苦労と見聞、後者は工場で働く少年労働者への切ない思いを歌うものである。「喇嘛廟行き」（戸倉さい子）は五連で、ラマ教とその僧などに触れている。「雑詠」（福井美智子）は七連で、戦死した兵隊をテーマにしたもの。「瓦に題す」（本田興村）は六連で、蒙疆での空虚の心情を「瓦」に喩えて歌っている。「花

と雨」（川添まなぶ）は四連で、雨に濡れた庭にあるコスモス、万年青、朝顔、ダリヤの花を鑑賞する歌。「雑詠」（松井卓海）は三連で、朝の兵営の風景を描写している。「雑詠」（小野坂仲三郎）は二連で、草原の道を歩く時の感覚、目にしたラマ僧の姿を描いている。「本多ケ丘に詣りて」（金井春雄）は四連で、〈ツハル山〉の真中にある〈本多ケ丘〉を再び訪れたときの感激を歌うもの。本多ケ丘とは、張家口市の南にある丘陵性の丘で、盧溝橋事変に際し日本軍の本多部隊の戦闘地でもあったことから名付けられたものである。

評論は、三篇とも短歌について論じたものである。

本号の巻頭に掲載された「短歌の理念」（南春夫）は、短歌の形式や「現代的文学性」などについて論じる。また、土屋文明の作歌理念を部分的に拾って紹介している。文末に「（未完）」と記載がある。「作歌私論（一）」（神林節）は、短歌の「真実性・現実性」を強調した。「蒙疆の歌」（本田興村）は、蒙疆短歌の独自性について論じる。内地の「佳麗」「美観」と異なる蒙疆の「枯れの一色」の現実を「正確に如実に表現し、より以上作者以外の者にも感激を與へ切実感を起さしめる事に短歌の真の良さ即ち生命が有る」と述べる。

詩欄では二首の詩を紹介している。「しろいかべ」（南春夫）は、不眠に悩むほどの「僕」の重い心情を語っている。「―二六〇二・九・一〇―」と脱稿年月日の記載があるが、「二六〇二」とは、皇紀二六〇二のことを指し、一九四二年にあたる。「海征く弟」（大川きく）では、「私」は海軍になった「弟」を恋しく思いながら、「御国のためと働いて下さい」と祈る。筆者は新人として「蒙疆文学」にデビューする。新人でありながら、「女性らしい優しい神経の行きとどいた作品だが、静かな中にも胸に迫る力を持った佳作だ」と編輯人の赤塚欣二から推薦の句を得た。

随筆欄は、前号と同じように、四篇の作品を集めた。「勇ましくない文学」（青木啓）は、文学は同時代の政治の干渉に妨げられてはならない、文学の生命は真実であると述べる。「―昭和一七年八月一七日夜―」と脱稿年月日の記載がある。「奈落または漠然たるものについて」（沼田英一）は、芸術の軽重を計る場合、「奈落または漠然たる」要素の存在が看過できないと強調する。「日々片々」（林田芳人）は、身辺雑記風な随筆である。筆者は先月から蒙疆文学同人となり、張家口から遠く離れた海拉爾という町に居住している（「編輯後記」）。「此頃のことども」（赤塚欣二）は、四通の「吉本兄」宛の手紙の形で書いている。筆者は、蒙疆を去った「吉本兄」と別れてからの寂しい心情及び、「蒙疆の黄土の上に足跡をつけてみせる」と抱負を語る。

創作欄は、牛村義雄「輪廻」という中篇である。筆者の牛村は蒙疆文学の新人。作品は庄松一家の物語。庄松という男は百姓をやめて、妻子を連れてある田舎町にやってくる。酒癖が悪いのが有名。長男の與吉は、二一歳になった時徴兵検査に合格し入隊したが、まもなく胸膜炎で除隊される。與吉はおふみと交際をはじめる。最初は父に反対されたが、おふみの兄竹男に赤紙の動員が来たのをきっかけに、おふみは與吉の花嫁として

認めてもらう。一家団欒の夕食の場面で終わる。

その他、「オルドス」では、最近の文化界の動き、張家口の相貌、在蒙邦人死亡が多い出来事などに触れている。また、先月号創作欄の「幻影」（浅井彰夫）についても一言批評している。

「九月の記録」という短文では、蒙疆文学同人の主な行事などが紹介されている。中には、「二日「蒙疆文学」一般店頭売許可となる」という記事もある。

第一巻第五号は、一九四二年一一月に発行された（＊未見）。

第一巻第六号は、一九四二年一二月一一日に発行された。

この号の表紙には、「大東亜戦争一周年記念」、「蒙疆文学賞「詩」入選発表」と表示されている。このことは、本誌の性格をよく表している。文学雑誌でありながら常に政治的なスローガンを優先的に掲げなければならなかった。一方、文学賞の発表は、文学雑誌の〈文学〉の一面を力強くアピールしていることを表す。

巻頭随筆の「大東亜戦争一周年を迎へて」は、大東亜戦争は米英を撃滅の聖戦である、我々の文化運動も、蒙古民族、漢民族の指導者である心構えを持たなければならないと述べる。

蒙疆文学賞「詩部門」の入選が発表されたことによって、この号は「詩の特輯号」となった。

「入選」は一篇、南春夫「水を運ぶ老人」である。二六行で、蒙疆の「現地人」の生活を描いている。真夏の炎天下、一輪車に水を湛えた一人の老人の姿に、逞しさと素朴なものを感じ取った著者。詩の下方に手押しの一輪車で「水を運ぶ老人」のカットがついている。「佳作」は以下の五篇である。「駱駝」は、九行の短い詩である。蒙疆のシンボルである駱駝をタイトルにしたのは、一見エキゾチックのあらわれのようにも見えるのだが、駱駝への観察は鋭く、描写も人の心に残るようなものであった。例えば、「喇嘛の尖塔よりも痩せた体で」や「禿げた背の瘤　垂れさがった咽喉」のような描写。著者の落合郁郎は、落合利巨ともいい、大連生まれで、日本での生活体験がないようである。「作文」の同人で、『三人集』という詩集が出されている。大連、新京（現長春）、天津、張家口に居住したことがある。「駱駝」は、彼の「蒙疆文学」誌上での最初の詩となる。「包頭の土城に倚りて」（甲斐弦）は二〇行、蒙疆の西側にある歴史のある町〈包頭〉を取り上げている。「蒙古の若人よ　鉄騎一〇万朔北に　起りし」とは、当時日本軍と肩を並べて包頭を占領した「蒙古軍」のことを指す。「清河の畔にて」（赤塚欣二）は二〇行。「新しき国創る熱情」を持って、荒涼たる蒙疆の土地にやってきた「私」は、時には悲しく思うが、「春近い清河のほとりを」歩くのだ。「静動」（原昌）は、三二行で、〈綏遠城〉の新しい風景を描きながら、「私」の「東亜民族解放」の抱負を語る。綏遠城とは、蒙疆の西部都市厚和の一部である。厚和は、綏遠城と帰化城に成り立っている。また、「（一七、八、二）」と脱稿年月日の記載がある。「愛情」（八雲郁重）は四七行の長詩である。「私」は我が子の可愛さに全ての愛情を注ぐ一人の親

である。「私」は実は「叶はざる憧憬への苦悩」を抱えている。しかし、我が子に「祖国を全身に支へて　立派に、立派に、生きてくれ」と願う。そのために自分の生き甲斐も見つけたという内容。

選評は、三好達治と前田鉄之助によって書かれた。三好達治は「選後寸言」で、個々の入選作については、選評していないが、「文化の水準、詩感や文学観の標準がこのやうに大東亜圏内いづれの地に於ても優劣なく高低もなく均一化されてゐるのは、或は甚だ慶賀すべき現象かも知れない」とコメントをしている。前田鉄之助「選後寸評」は、個々の詩についてコメントをしている。総じて、受賞した六篇は「蒙疆の風物が真面目に歌ひ上げられて居た」と述べる。

詩欄の詩の他に、二位原経清「慰霊祭にて」（朗読詩）というものがある。蒙疆文学賞の入選詩ではない。詩の末尾に「（我が兵に捧げるうた……より）」という記載がある。朗読詩とは、おそらくラジオを通じて、或は蒙疆同人の詩の朗読会において朗読した詩のことだと推測する。蒙疆懇話会の前身は詩人協会であったことを物語っている。

短歌欄では、六人の作品が掲載された。これらの短歌のタイトルは目次には記載されていなかった。宮地信人「蓖麻の葉」では、明月が蓖麻の葉に冷たく光る雨の夜、長病みの治った我が子を連れて、庭にある蓖麻の落実を拾うということが描かれている。高野たけし「張家口に三年ありて」は、「日にけに近代様式に変りゆく首都張家口」の大きな変化を歌っている。神林節は「身辺雑詠」では、現実の民の生活の実状に関心を寄せ、「秋日」では、川に白樺の落葉が浮かび、ポプラや柳の色が黄色に光ると北国の秋の景色を描いている。山口智恵「三陽泉に遊ぶ」は、三陽泉の白樺・山菊・紅葉などを歌っている。市尾フクヱ「雑詠」は、戦場で生き残ったと告げる兄の手紙や子供と自分が病気をしているなどの雑感である。伊知原孝一「雑詠」では、一二月八日の真珠湾攻撃を意識し「わがなす業」に勤しむと抱負が語られている。

評論は、南春夫「短歌の理念（承前）」で、第四号の同題評論の続きである。「短歌は民族伝統の大和へ高まる精神、信念をしっかり握りしめてゐることによつて作品が完成されるのである、今日の鴻業に対処する歌人がその任務を真に自覚するところに短歌としての伝統が維持されるのであ」り、「これが今日の短歌の創造理念」と述べる。

俳句欄は、やや寂しい。「十二月八日を迎ふ」（金子蟹石）「夜寒」（深堀矢寿路）のみであった。前者では、特攻隊員の「九柱神」を称え、戦争の必勝を誓っている。後者では、秋の風景を描写している。

蒙疆文学は、現地を取材したものを重視する傾向を持っている。この号に掲載されたルポルタージュは四篇にものぼった。「愛路村視察記」と題した現地報告は、「水荘屯を訪ねて」と「農村雑記」の二篇から成り立っている。張家口鉄路局愛路村を視察したルポルタージュであった。「水荘屯を訪ねて」（竹坡生）は、水荘屯の実態について、「一、郭磊荘駅の休憩所」「二、

部落に入る」「三、農民との座談」という三つの見出しから成り立っている。「農村雑記」（高島喜久夫）は、同じ水荘屯の実態を治安と自衛の視点から調査したものである。「ソニツト通信（第二報）」（林正盛）は、草原の奥地にある小学校の様子などをリポートしたものである。「西北序説（二）」（八重沢光）は、現地に赴いて取材したものではないが、チベットの沿革、現在の社会状況、独立の問題などについて論じたもので、「現地もの」の一種であると言える。

創作欄では二つの短篇が掲載された。「復活祭まで（第一回）」は、著者林田芳人が「蒙疆文学」に発表した筆者の最初の小説である。「私」は、内地の京都から北満の哈爾浜に招聘され、哈爾浜市内の郵政局に勤務するようになる。宿探しの苦労を中心に描き、「東洋の巴里」と内地の案内書で書かれた哈爾浜への憧れは、「煤煙をかむつて古ぼけ」た現実の前で、郷愁に変わっていく。「憎恨」は、青木啓の小説第二作である。第三号に発表した「うたかたの挿話」は、彼の処女作である。貧しい銀行の出納係である主人公與右衛門老人は、こつこつと貯めたお金の大半を、甥の九造に騙されてしまい、甥に対する憎恨は、死ぬまで消えることはなかった、という物語。

その他、「オルドス」では、主に文学と政治との関係について論じた。

第二巻第一号は一九四三年一月一日に発行された。

この号は、昭和一八年の新年号である。蒙疆文学賞短篇小説部の受賞結果が発表された。入選一篇、佳作五篇。入選は「纏足の頃」（石塚喜久三）で、佳作は「緑山荘」（小池秋羊）・「生活」（八雲郁重）・「初期の経験」（仲田六郎）・「鉄橋と少年」（森江栄）・「芽ばゆるもの」（小柳哲夫）である。なお、「蒙疆文学賞」全部門受賞状況については、編者は文末の「附記」に紹介する。

蒙疆文学賞短篇小説受賞結果の発表に伴い、巻頭の創作欄に受賞作の三篇が掲載された。石塚喜久三の「纏足の頃」は、のち第一七回芥川賞にも受賞した。蒙疆で生活する蒙古族と漢民族間の葛藤をテーマにした小説。「初期の経験」（仲田六郎）は、「私」という男を主人公とし、日本から蒙疆の首都張家口にやって来てしばらく暮らしていた。蒙疆生活の経験を回想風に語る作品である。「鉄橋と少年」（森江栄）は、〈鉄橋警備隊〉炊事場で炊事の手伝いをする少年楊四芳と、下士哨の町田という兵隊とのやりとりを中心にした小説。「復活祭まで（第二回）」（林田芳人）は、受賞作ではないが、前号から創作欄に連載されている。「私」は、哈爾浜に着いた最初のころは、一一人で一部屋に暮らしていた。その生活ぶり、「東北組」と呼ばれる三人組の事、職場での出来事、同僚の馬場という女性の紹介で私と尾崎は郵政局の宿舎を離れて引っ越したことについて、写実風に描写する作品。

選評は、上泉秀信から寄せられた。彼は「選者の言葉」においては、他の五篇の入選作に触れているが、ただ小柳哲夫「芽ばゆるもの」にのみ言及していない。

評論欄には二篇ある。「大東亜文学に就ての覚書」（小池秋羊）

は、一九四二年一一月東京で開催された第一回大東亜文学者大会の印象記である。作者は蒙疆代表として、恭佈札布、和正華と三人で出席した。作者は、この評論において「大東亜文学の権威は東京の文壇が代表すべきであ」り、現地作家は現地作家しかできない現地的創作を志すべきだと呼びかけている。「創業期の陣痛」（八重澤光）は、副題「―蒙疆文学論の一章―」と書いたように、主に蒙疆文学について論じたもの。前半では日本文学と中国文学や西欧文明という異文化との関わりの変遷を辿り、後半では「蒙疆文学」創刊号から第四号までの作品について概論している。

短歌欄は、依然として堂々と九人の作品を紹介している。作品名は目次に記載されていないので、本文によって補充することにした。宮地信人「葡萄其他」は、実った葡萄、高原の月、生き残ったと知らせる義兄の戦場からの手紙、そして蒙疆に来て三年の歳月が過ぎたという筆者の雑詠である。高野たけし「冬」では、冬は寒くて寂しいと感傷する。神林節の二首は「弟」と「苦力生活六題」である。「弟」では、南の戦場から来た「弟」の手紙は「姉」の手元に届くまで実に八ヶ月もかかり、戦友の戦死を悲しむ「弟」の手紙を読んだ「姉」は、ひたすら「弟」の無事を祈るばかりである。もう一つの「苦力生活六題」では、汚れた格好をしたり、道の片隅で虱を取ったり、粟粥を美味しそうに食べていたり、土砂を運んだり、一坪の家に六人家族が起臥を共にしていたりする「苦力」の生活風景が描写されている。「秋より冬へ」（川添まなぶ）は、晩秋の夜「一人居」の寂しさを歌っている。山口智恵「三陽泉に再び遊ぶ」は、秋の紅葉などを見物したときのことを書いている。「旅路」（中村洋子）は、二夜を列車の中で過ごした満洲での旅をテーマにしたもの。「児」（市尾フクヱ）は短いもので、昼寝をする我が子というような日常生活の一断片を書いている。「雑詠」（伊知原幸一）では、雨が降ると日暮が早く感じられると、細かい観察が書かれている。「雑詠」（戸倉さい子）は、「民族」を論じたもの。

俳句欄では、三人の作品が紹介されている。「土を截る立体」（萩原麥麦）は五句、ショベルで土を截る「苦力」の働く姿を描いている。「晩秋初冬」（深堀矢寿路）は五句、北風の吹く夜、荒涼たる野にある鉄路が光って見えるという風景。「秋」（大川きく）も五句で、蒙疆という異郷で秋刀魚を焼く日常生活の一場面を描いている。

詩欄には、三人の作品がある。「吾児の歌」（二位原経清）は、「兵隊のお母さん」という登場人物が、兵隊に敬礼するという内容。「郷愁」（後藤静穂）は、コスモスや蝶々を見て「秋の郷愁」におそわれる。「雑想」（小柳哲夫）とは、「長城の稜線と堡塁」は毛虫のように伸びている、社宅の工事が進んでいる等々。

随筆欄は、四人の作品がある。「青葉の輝き」（牛村義雄）は、日本に一時帰国中に書いた雑感で、「自炊漫談」（石塚喜久三）は、筆者の三年に近い自炊生活の断片で、「日々片々」（林田芳人）は、「胃潰瘍」と小タイトルを立て、満鉄の何処かに勤めている隣人のKさん、その妻が胃潰瘍で倒れるというような日常生活の断片を書いた作品で、「此頃のことども」（赤塚欣二）は、最近の

読書感想や新年の計画について語った短いエッセイである。

〈現地もの〉はますます重視されるようになり、その数は四篇にのぼる。「黎明オルドスの暁鐘―大樹湾蒙民移墾部落記―」（増田弘道）は、大樹湾は、蒙疆の西部にある伊克昭盟達拉特旗に位置する。一九四〇年（昭和一五）五月一五日蒙古農民の大樹湾移墾地に入植するまでの経緯、入植後の現状などについてのルポルタージュ。「塞北の鎮（農村を往く―二）」（浅地央）は、「列車中の白系露人」「砂でつくつた堡塁の街」「こども達の「経済理髪店」」と三つの見出しを立てて書いたルポルタージュ。塞北の鎮とは、北京と張家口の間にある懐来県沙城鎮を指す。「蒙古民族の口伝」（小川三直）は、大変ユニークな作品で、編者はあえて〈聞き書き〉という項目を立てて紹介している。筆者はモンゴル語に堪能、蒙疆北部の察哈爾盟と西部伊克昭盟のラマ僧から聞いた二つの伝説を日本語に訳した。「蒙古の法律」（筈見武夫）のなかで、作者は、『蒙古律例』という本は「清朝政府の対蒙古人政策を知る有力な資料でもある」と述べ、「この中から面白い犯罪例を拾つてみることにした」と内容を紹介している。

「オルドス」は、新年号として、去る一年蒙疆懇話会の文化活動を振り返る内容が中心である。

第二巻第二号は、一九四三年二月一日に発行された。

創作欄では、蒙疆文学賞短篇小説受賞作「佳作」二篇、連載小説一篇が掲載された。「緑山荘」は、筆者小池秋羊の最初の小説である。張家口にある「緑山荘」の経営者佐田嘉太郎と小高勢伊子との関係を中心に描いた小説。もう一篇は「生活」（八雲郁重）である。夫の一条良平は張家口に勤務、妻の桐代は子連れで北京に暮らす。別居生活をするこの夫婦の間に、不安と不信感が生じる。「会社の家族は夫の勤務先に家のない場合は、大抵が北京とか内地とかに別居してゐ」た。しかし、別居していない夫婦もある。夫の友人の高木夫婦は、すっかり張家口に馴染んで幸せそうに暮らしている。妻の桐代は彼らの生活態度に感銘を受け、狭い住居の困難を乗り越えて夫との同棲を始めようと決心する。「復活祭まで（第三回）」（林田芳人）は、三回にわたって連載したが、この号をもって完結する。新しい家での生活や哈爾浜の見聞について描く。四月二〇日は哈爾浜の植樹節で、またロシア人の復活祭でもあった。復活祭まで、私が哈爾浜に六ヶ月滞在することになる。この体験を通して、私は「年から年中悪病は流行し、町中は始終匪賊は一日中かけ廻り」というような内地の認識を持っている家族や親戚に、哈爾浜の生活や土地柄を伝えなければならないと思うようになる。

選評は、横光利一「短篇小説選評」である。選評は、前号の上泉秀信の他に、蒙疆文学賞・短篇小説部門の審査員横光利一、川端康成にも頼んだが、横光と川端が旅行中だったため、前号に間に合わなかったようである。この選評にも気になる点が一つある。前号同様、他の五篇の入選作に触れているが、小柳哲夫「芽ばゆるもの」にのみ言及していないことである。この「芽ばゆるもの」は「蒙疆文学」誌上発表されたことはなかった。

詩欄では、三人の詩が紹介されている。「秋の蝶」（大川きく）は八行で、海を越えてきた母の手紙は祖母の死を知らせるものであったので、心の平静さを失い、庭に立ち、茉莉花に戯れている秋の蝶々が目に入るという内容。「十二月八日」（落合郁郎）は一二行、日本軍のハワイ真珠湾攻撃一周年を記念にした詩。「韃靼」は二二行、「亜細亜のたゝかひの糧をつく」るために、「私」は今「韃靼」で働いているという内容。「韃靼」とは、モンゴルの旧称である。筆者緒方禾の本名は宇田忠一郎。

評論は、二位原経清の「日本詩魂について」で、日本の「詩魂」の純粋さについて論じる。日本の「詩魂」を個人主義的な感傷や汚辱感等に要約してはいけない。詩人たちは、「日本人の霊魂はその自然発生的な神代に於て既に詩魂であつたこと」を確信しなければならない、と主張する。

短歌は、ぐっと少なくなり、四人の作品しかなかった。大江新「雑歌」は、「忠霊塔謡奉納」や「中秋賜児山にて」の説明文から、「雑感」の内容が伺われる。「忠霊塔」とは、蒙疆忠霊塔のことを指し、一九四二（昭和一七）年一〇月一七日に、蒙疆忠霊塔顕彰会を中心にして建てられたものである。「賜児山」とは、張家口第一の勝地として知られている。高野たけし「冬にやみて」は、モンゴルの冬景色について、日差しが弱い、室外は寒くて子供の遊ぶ姿さえ見られない、と観察する。そのなかに、病気をした自分がいる。実に寂しい風景である。中村洋子「ふるさと」は、庭に松かさを拾うふるさとの思い出が描かれている。迎山恵生「雑詠」では、「八紘一宇」を大きく取り上げられている。

俳句欄には一〇人による一一首のの作品がある。その中には兵隊や戦闘をテーマにしたものが多い。例えば、「寒天」（武田鶯水）は五句で、冬の夜に行われた兵隊の行軍を描く。「凍夜」（川口白涯）は五句、「入営」の一場面が描かれ、「雑詠」（服部勝湖）は七句、「城門を守る兵」に敬意をあらわす詩。金子蟹石の二作は各五句で、「近詠」では、暖炉に囲まれている「自分」が、戦っている兵士を思いその勝利を祈り、「戦ふ春」では、南北に広まる戦闘の勝利を祈ると書かれている。また、村上心美・遠藤たけし・中野鶯声三人の作品名は、目次にも本文にも表示されていないが、著者名の上方に「戊第〇〇〇〇部隊」と表示があり、戦場のことや郷愁を描いたものである。その他、「蜜柑」（深堀矢寿路）は五句、蜜柑の成熟した景色を描くことでふるさとへの郷愁を表している。「蒙古美術展」（大川きく）は三句。他に、病気の母に毛糸を買うという内容のものも二句ある。「冬」（小野満仁）は五句、野焼きをする様子を描いている。

この号から、初めて紀行文が掲載された。「新湾子行」は、蒙疆天主教の発祥地として知られている「西湾子」についての紀行文である。目次と本文のタイトルでは「新湾子」と表示されているが、本文中では、ほとんど「西湾子」と表示される。「西湾子」の方が一般的に呼ばれているようだ。

「古城堡へ（陽高古墳発掘行）」は、筆者の武三朗が、考古学者小野勝年、日比野丈夫に同行し、晋北の陽高古墳現場へ行った一〇日間の見聞について書いた紀行文である。

もう一つの新しいコラムは、「絵と文」といい、蒙疆美術協会のメンバーの作品を掲載している。高玉輝雄による二作品があり、「春日」は、上方はスケッチ、下方は張家口市の一風景についての小文、「城壁」は、上方はスケッチ、下方は「宣化」という町の一風景についての小文。

随筆は、「『黄河』に就ての手帖」である。黄河の名称について、中国の書物を参考にしながら自分の見解・感想を展開している。著者の横澤宏は、一九〇五（明治三八）年京都に生まれ、一九二二（大正一一）年旅順の大連新聞社支局に入社した。一九四二（昭和一七）年、蒙疆新聞社連絡部長として始めて蒙疆に来た。同年八月「蒙疆文学」の同人となった。

〈聞き書き〉は、前号に引き続き「蒙古民族の口伝（二）」が連載されている。しかし、前回から連載している文章であるが、なぜか著者名が〈小川三直〉から〈橋口三郎〉に変わった。橋口三郎は、大正三年生まれで、昭和一六年に蒙疆財団法人蒙古善隣協会張家口調査部に勤務し、一八年に退職した。彼は、善隣協会勤務中、「蒙古伝説童話」のような作品も書いている。

「蒙疆文化への約束」は巻頭随筆で、一二月二六日に結成された「蒙疆興亜文化同盟」の役割について「指導者である日本人の教養の錬成」、「現地同伴民族への文化的指導」、「蒙疆の建設を祖国の同胞たちへ正確に報告」と三点にまとめている。

「オルドス」は、蒙疆興亜文化同盟結成の重要性、大東亜文学者大会の役割、張家口に図書館を建設する必要性などについて述べている。

その他、「大同俳句部十二月例会」では、白涯ほか一二人の俳句を紹介している。

第二巻第三号は、一九四三年三月一日に発行された。

この号は、詩の紹介に力を入れ、〈詩特輯〉の形となった。

詩欄では、落合郁郎をはじめとした六人の堂々の陣を揃えた。

「絶嶺」（落合郁郎）は散文詩で、命令を受けた「一人の兵」が懸命に峻険な山々を駆け続けて遂に山嶺に辿りついたという場面の描写を通じて、責任感に支えられて任務を果たす兵隊を称える。「死の街」（横澤宏）も散文詩で、蒙古の砂漠の街を、かつて西洋の宣教師が歩いていたが、今日は日本人の科学者がその砂を掘りかえし、新しい「歴史を組み立て」ている。日本人を「科学者」や「考古学者」に代表させ、その偉業を特筆したもの。本文に「―蒙疆詩景の一―」という副題がつき、詩の末尾に「七三八・一・一六」と脱稿年月日の記載がある。七三八は成紀（チンギスハーン紀元）七三八年のことで、一九四三年にあたる。「火のある風塵」（柘榴研太郎）は二三行で、「拳銃の名手」「不適の射手」を称えるという内容。「一七、一二、二八」と脱稿年月日の記載がある。「黄塵空を覆ふ」（赤塚欣二）は、黄塵に覆われた蒙古の空に「日本の花」がひらくという詩。末尾に「（祖国への回顧」より）」という記載がある。「紀元節」（高野たけし）は長歌で、蒙古という「外つ国」に大きな日の丸の国旗が掲げられ、「喜びのたとへようなし」と歌っている。「児玉芳郎君」（南春夫）では、「僕」のところに、戦場に出征した

「児玉芳郎君」から二つの星の勲章をもらったと報告する手紙と写真が送られ、それを見た「僕」は「三つ星の元気な写真を待つてゐるぞ」と期待を寄せる。「―二六〇三、二、四―」と脱稿年月日の記載がある。

俳句欄は、「平旦村ほとり」（萩原寥）と「炉の焔立つ」（金子蟹石）の二つのみである。前者では、「平旦村」の駅や沿線の景色、後者では、「青春の夢」を目の前に燃えている炉の焔に喩えて歌っている。

評論は、沼田英一の「現地主義文学についての保守的感想」で、蒙疆文学に対する一つの批判を行った。筆者は、蒙疆文学には窮屈な現地主義的傾向が強いと指摘する。言い換えれば、新しい環境のもとで独自のものを造り出そうとする蒙疆文学には、無理が生じているという指摘。また、東京の文壇がこの傾向を尻押していると大胆に指摘する。このような大胆かつ厳しい批評をするには、書く側は勿論、これを掲載した雑誌側も、勇気のある決断を必要としたであろう。

随筆は、二篇である。青木啓「無軌断想」は、「考える」や「思惟」について論者独自の見解を述べた短いエッセイである。赤塚欣二は「此頃のことども」において、昭和一四年から蒙疆に居住しはじめてから四年間の生活を簡単に振り返っている。

石塚喜久三の「美しき人達」は小品である。

絵と文は、三篇である。「温み火」（西原良蔵）は、中央は絵（兵隊の寝態）、周囲は文。「子供の顔」（高玉輝雄）は、上方は女の子の絵、下方は張家口の一風景について書いた文。「オボ祭り」（山田英哉）は、上方は絵、下方は文。「オボ祭り帰りの娘さんであらう、真白な馬を二頭牽いて、遠くの部落に帰つて行く」と冒頭の一文は、絵の説明にもなっている。

聞き書きの三回目は、「蒙古民族の口伝(三)」（橋口三郎）で、「約束の鏡」「夢で勝つ」「黒馬の子」の三つの童話が書かれている。

ルポルタージュは、林正盛「スニツト通信（第三信）」である。タイトルは、本文では「ソニツト通信（第三報）―「ノゴー」―」と表示。副題の「ノゴー」とは、モンゴル語で「野菜」の意だが、本文では、韮に似た野菜のことを指す。ビタミンを摂るため、このような臭い野菜を食べなければならない草原地帯の過酷な暮らしの体験を語る。

創作欄は、二篇の短篇である。「王子村」（丹沢望）は、本文では「王子村（ワンズツン）」と表示されている。「王子村」は、「共産八路軍」と「偽県公署」の板挟みになっている。二人の村長がいることは、このことをよく象徴している。八路軍が来たときは、八路軍の陣営に飛び込んだ「鼎健」が村長になり、県公署から人が来たときは、元村長の李鳳周が再び村長を務める。王子村は、日本軍が来る前に、既に八路軍の行政区の一つであった。やがて、日本軍が村公所を開設するために村に入ると、八路軍が一時的に引き揚げる。県公署の役員の斉藤補佐官（鬼補佐官）は、村公所を設けるために、頻繁に王子村に来るようになる。そのうち、李村長の次男「二子」と仲がよくなる。二子は、斉藤の命を助けるために、八路軍の作戦計画を斉藤に通知しようと家

を飛び出す。この最後の場面は象徴的である。「代用通訳」（丘土筆）は、冒頭に「此の一編を故陸軍中尉上田利輝の英霊に捧ぐ。」と書いてある。山岡一等兵である「私」は、百武部隊隷下で、昭和一四年九月から二ヶ月の「支那語の修行教育」を受けた。翌年一月、私は、〇〇分駐警備隊の代用通訳となる。しかし、私の支那語は全然通じなかった。従って、衛兵につかないとき、また勤務のない日のほとんどを、支那人の部落に飛び込んで、支那語の修得に励んだ。その体験を描いた小説。

「オルドス」は、スウェーデンのアンダーソン「「黄土地帯」―北支の自然科学とその文化」についての書評である。和訳本について、「東京、座右宝刊行会版、松崎寿和氏訳、定価六円三〇銭」と紹介。

編輯後記は、編集人は赤塚欣二から長浜連に替わった。この時期、「日本では、再び紙の統制が強化されて一流の総合雑誌ですらも百五、六〇頁になった」という紹介が見られる。

第二巻第四号は、一九四三年四月一三日発行された。

「蒙疆文学」は蒙疆に唯一の月刊文化雑誌なので、文学だけでなく、文化的なものの紹介も必要とされている。このような編集の指針に応じて、今月号は、現地文化紹介という視点から、巻頭において「中国禁煙法令変遷史（一）」（于恩徳著　小路嘉治訳）が掲載された。

詩欄には三首の詩が集められた。「祈り」（落合郁郎）では、「皇民われ　戦ひ勝て、と　けふしも吾子と　山に向ひて祈るなり」と作者の兵隊の激励の思いが見られ、「秋雨」（関根博司）では、心の底にある「ほのかなもの」に望みを託すという心情、「黄塵余録」（菊池重雄）では、蒙古の有名な黄塵をはじめ、「迷路の胡同」や「老子の後裔を尋ねて」みたいという「私」の四年間の在蒙生活の断片が描かれている。後者の末尾に「「カルガン詩集」より」と記載がある。

短歌欄には三人の作品がある。「草原抄」（篠津原一郎）は一六連、遊牧民の素直さ、同志の死、寂しい蒙古桜、蒙旗建設隊、祖母の便りなど蒙疆での生活が中心に描かれている。「春立てむ」（鈴木透）は六連、春の訪れに従い障子が開けられるようになったという日常生活の光景から、恋の季節であるが恋というものはなかなか堪えがたいものだという春愁までが描かれている。「野火」（中村洋子）は六連、春を表す季語の「野火」であるが、ここでは、「野火は寒空に白き煙りはゆるく流るゝ」「枯草は音にたちつゝ燃えゆきて」と実際の野火の場面が描かれている。その他「蒙古を思ふ」（三連）がある。

聞き書きは、「蒙古民族の口伝（四）」（橋口三郎）で、「打出の小槌」と「嘘言人を殺せり」が載せられている。

絵と文欄は、二本である。「察哈爾の花嫁」（大西喜美子）は、上方は花嫁のスケッチで、下方は詩と文である。「草原」（高玉輝雄）は、上方はモンゴル人女性のスケッチで、下方は文である。二人とも、蒙疆美術家協会の会員である。

評論は、「様式創造」（野津彰）は、張家口に居住する日本人の生活態度について批判している。

小品は二本で、著者はいずれも石塚喜久三である。「他山の石」では、巨勢という男は、四人の友達に自分の未発表の小説のあらすじを語らせる。小説のなかの登場人物は、巨勢、徳原清一、徳原の母、疆子。石塚喜久三は、「大陸の受胎」（「大陸」昭和一四年一二月号）を発表したとき、「巨勢豊嗣郎」というペンネームを使ったことがある。

俳句は、「「悲愁抄」（一）」（萩原寥）と別に俳句欄の四人の俳句がある。前者の本文では、副題「……俳句の伝統を霾あれる蒙疆に産まんとして……」、著者「萩原寥」と表示。第一部は「夏の旅」で、その中では「唐山（たんさん）へ」「天津（てんしん）にて」他一六の見出しに分けている。

俳句欄の俳句は、作品名が目次には表示されていないので、本文に拠る。金子蟹石の二首は「裘（かはごろも）」と「局友の結婚を祝して」で、前者は二句、空に鞭を打つ御者の姿や手間賃を分ける場面が描かれ、後者は三句、友人の結婚祝いへの言葉が述べられている。「雑詠」（中野鶯声）は二句、春を歌っている。「雑詠」（小松よしを）は三句、警戒兵の声が聞こえる蒙古の一風景が取り上げられている。「春」（山本重雄）は二句、「妻乗せて驢馬ひく人」などの風景を描いている。

創作欄では、小説が三本も掲載された。

小池秋羊「甘露」は、南京を攻める戦闘中、従軍記者の尾久の所属する××部隊が、中国軍の必死の抵抗により、何日も前進できずに飯も水も取れない窮地に陥る。落城の前夜、「ウシ」と呼ばれる「苦力」が、死の危険を冒して水を汲んでくれた。そのお陰で、皆元気を取り戻した。

「歪められた部落民」は「蒙古民族の口伝」の著者橋口三郎の初めての小説である。張家口の北側にある蒙漢雑居地の物語。「ヤマタ」と呼ばれる漢民族化した蒙古人の一族九三人が、アルタン・ガタス・ノール（塩湖）に頼って生活を営む。やがて、漢民族の陳松貴が副村長になり、村の実権を握るようになる。彼は、塩湖に塩が出なくなったら家畜を持たないこの一族は生きていけないという危機感から、農耕を導入しようとする。草原を破壊する農耕は、最も蒙古人に軽蔑されている。陳の考えを堅くさせる人物が登場する。蒙古の実態を調査している日本人学者の小川が、ある日この村にやってくる。彼は、「ヤマタ」や「アルタン・ガタス」の名称の由来から、純蒙地でない蒙古人の生活にとって農耕生活の必要性まで、村人に長々と説教したあと去ってしまう。

「古城物語」（丹澤望）は、文末に「（七三八、三、一〇）」と脱稿年月日の記載がある。「七三八」は、成紀（チンギスハーン紀元）七三八年で、一九四三年にあたる。宣化省の「万全」という古城を舞台にする。草原の奥地で運搬の仕事をする「私」は、ある日「万全」という古城を目前にして泊まることになる。駄菓子屋を営むある「老頭児」から古城の由来を聞かされる。それに「私」の貧しい東洋史の知識を加えて、四百年前の明世宗の時にあった楊鵬・春蓮父娘の悲しい物語を書く。城主王浩は「戦ふ事以外に文化を知らない夷狄の耳朶に漢人の持つ文化の価値を響き渡らせてやらう」と思った。そのために、城内一の鐘鋳

りの楊鵬に名鐘の鋳造を命じる。楊鵬は一二年の歳月を費やして名鐘を作り上げたが、長女と自分の命はその代価となった。

「オルドス」は、未署名だが、本文では「オルドス子」と自称。『中国長城沿革考』（主国良、商務印書館版）について書評が書かれている。

附記

＊蒙疆文芸懇話会規約（第一巻第二号より）

第一章　総則

第一条　当会ハ蒙疆文芸懇話会ト称ス

第二条　当会ハ職能翼賛ノ本旨ヲ体シ吾ガ蒙疆文化精神ノ昂揚ト東亜民族ノ協力一致ノ樹立ヲ目的トス

第三条　当会ハ事務所ヲ張家口ニ置ク

第二章　事業

第四条　当会ハ其ノ目的ヲ達スル為メ左ノ事業ヲ行フモノトス

一、月刊雑誌ノ発行

二、講演会並座談会ノ開催

三、研究発表、作品ノ討議会開催

四、蒙疆文献ノ調査、蒐集、翻訳

五、各文化団体トノ提携ニヨル共同研究ノ促進及共同事業ヘノ参加

六、政府ノ行フ文化政策ニ職能協力ノ万全ヲ期ス

第三章　会員

第五条　当会員ハ当会ノ目的ニ賛同シ当会ノ行フ事業ニ積極的ニ参加シ得ル者ニシテ会員二名ノ推薦アリタルモノトス

第六条　当会ノ会員ハ所定ノ会費ヲ負担スルノ義務ヲ負フモノトス

第七条　当会ノ会員ハ分チテ左ノ三種トス

一、維持会員　月額　金十円

一、正会員　月額　金五円

一、会　員　月額　金五十銭

第八条　当会ノ会員ハ役員会ニ出席発言スルコトヲ得ルモノトス

第四章　総会

第九条　当会ノ定時総会ハ年一回之ヲ開ク

但シ必要アルトキハ臨時総会ヲ開クコトヲ得

第十条　総会ヲ招集スル場所日時会議ノ主タル目的及決議スベキ事項ヲ記載シ同日ヨリ二週間以前ニ各人員ニ対シ通知スルコトヲ要ス

第十一条　総会ノ議長ハ会員中ヨリ総会ニ於テ之ヲ選挙ス

第十二条　総会ノ議決ハ多数決トシ出席会員ノ過半数ヲ以テ議長之ヲ決ス

第五章　役員

第十三条　当会ハ左ノ役員ヲ置ク

一、会長　一名

二、幹事長　一名

三、常任幹事　若干名

四、幹事　若干名

五、監事　一名

第十四条　役員ハ当会ノ会員中ヨリ総会ニ於テ之ヲ選任ス

会長ハ当会ヲ代表シ総会ノ決議ヲ執行ス

会長欠員ノ場合ハ幹事長職務ヲ代行ス

第十五条　役員ノ任期ハ一固年トス、但シ満期再選ヲ妨ゲス

第十六条　役員ノ欠員ヲ生ジタルトキハ前任者ノ残留任期ヲ会長ノ指名ヲ以テ役員補欠ヲスル事ヲ得ルモノトス

第六章　経費

第十七条　当会ノ会計年度ハ自四月一日至三月三十一ノ一箇年トス

第十八条　当会ノ経費ハ会員ノ会費、寄附金其ノ他ヲ以テ之ヲ支弁ス

第七章　部則

第十九条　当会ノ掲グル目的及事業ヲ行フタメ左ノ部及支部ヲ設ク

一、経理部
一、演劇部
一、企画部
一、編輯部
一、大同支部
一、厚和支部
一、包頭支部
一、宣化支部

第二十条　各部、各支部ノ常任幹事、幹事ハ役員ノ互選ニ依ルモノトス

＊第一回蒙疆文学賞受賞について　（『蒙疆年鑑』（昭和一九年版）より）

新蒙疆文化の昂揚のため成紀七三七年文芸懇話会が主体となり、政府弘報局、蒙疆新聞社の後援を得て「蒙疆文学賞」を設定、日、蒙、華三箇国語による民族歌謡、詩、小説の募集をなし、日文は故北原白秋、三好達治、前田鉄之助、上泉秀信、横光利一、川端康成の諸氏にその選を委嘱、華文は銭稲孫、柳竜光、張鉄生の三氏を煩はし、また蒙文は蒙疆新聞社の選として各種別毎に厳選の結果、次の通り第一回蒙疆文学賞の決定を見た。

▽民族歌謡
日文一等「民族歌謡」北支派遣戊第五三〇一部隊　浅井芳一
華文一等「四季花」張北県廟灘牧業試験場　武志新
蒙文　なし

▽詩
日文一等「水を運ぶ老人」張家口蒙疆汽車公司内　南春夫
華文　なし
蒙文　なし

▽短篇小説
日文一等「纏足の頃」張家口鉄路局勤務　石塚喜久三
華文一等「玲子」　王承琰
蒙文一等「偽政府から来た老女」　阿格登嘎

＊「蒙疆文学」第二巻第二号　表紙

（九州大学大学院博士課程三年）